秋田県現代俳句協会会報

No.95
令和６年３月９日
印刷　㈱八郎潟印刷

発行者　秋田県現代俳句協会
会長　竪阿彌　放心
事務局　〒〇一九―〇七一五
横手市増田町八木一二三
片倉　弓
ＴＥＬ　〇一八二―四五―二二三三

令和五年度　第二十九回

秋田県現代俳句協会　作家賞

くすくす

横手市　片倉　弓

相性の悪し豪雨のあとの二重虹
里山の親しき沢の秋出水
芒に風何もなき日のお赤飯
名月ややつぱり嘘はつけません
木の実落つポケットのないワンピース

天高し君はくすりと笑ふ癖
りんご椀ぐすつかり空気入れかはる
小鳥来るややのしゃつくり大人並み
ずずずずず猫の鼾と後の月
澄む水の石より固き母の黙
うそ寒し頭痛は河童のお皿ほど
初時雨ぱかんとあけるジャムの蓋
日向ぼこ語る言葉のかたむすび
鰭酒や父高らかに羽後訛
白鳥来こんなに風のきれいな日

受賞のことば

「あのね」

片倉　弓

七月の豪雨の折、流れ着いた子猫を飼う事にしました。数年前、近所の女の子が「あのね、パパが川の端に居た子猫を足で蹴って落としたの。」と、こっそり教えてくれました。この時の事がずっと気になっていたのかも。すでに飼猫が五匹、友人が何かあったら引き受けるよと言ってくれたので、生後二カ月頃の子猫が加わりました。

異常気象やコロナ禍、戦争など現代は人として生きるには虚しい事もあります。自分に何が出来るか、楽しさを追い続ける事が出来るかなどと頭をかすめます。

こんな日常の中、俳句を詠める幸せに気が付きました。巡りくる毎日は悲喜交交あるけれど、そこを乗り越える為に俳句があったように思えます。

句友、俳縁の頼もしさに気付き笑っている自分がいます。だから私の俳句はいつまでも幼い、軽い、でもゆっくりでいいやと開き直っています。

私の拙い句に命を与えて下さった作家賞の選考委員の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

数年前の女の子と私の会話の最後は

「〇ちゃんが、パパと同じことはしないって思えばいいよ。」

「あっ、そうか…。」

選考委員会の報告

選考委員長　竪阿彌　放心

第二十九回秋田県現代俳句協会作家賞の選考委員会は、令和五年十二月十六日午後一時少し前、選考委員全員顔を揃えたので、協働大町ビルにて開会した。選考委員は、竪阿彌放心、森田千技子、片倉俊秀、加藤昭子、船越みよ、三浦静佳の六人。（敬称省略）

作家賞の担当である森田千技子さんより、募集の経過報告があり、十一月三十日締切ったあと、用心して十二月五日に各委員に郵送した旨の報告があった。応募作品は七編であった。

各委員、作品をよく読んで、選考委員会に出席していた。はじめに選考委員長の互選にはいり、竪阿彌放心を選んだ。

委員長が、応募作品全編について、各委員よりそれぞれの作品の内容を批評して、その後もう一度見直して考えることを提案して、宜しとされた。

作品ごとの検討で選考委員の述べるところは多岐に亘ったが、次第に焦点が絞られ、それぞれが全編の批評を終える頃には輪郭が見えて来た。念のため、それぞれが一位に推す作品を発表してもらうと、七人中六人が、『くすくす』であった。さらに討論した結果、作家賞一、準作家賞一、入選一の三作品を選ぶこととした。応募作品が七編と少なかったので妥当なところであると言える。それでも作家賞を出すことができたのは、嬉しいことであった。

準作家賞

一　滴

能代市　岸部吟遊

日本海は大き内海黄水仙
鳥雲に北前船の錆碇
住み着きしここがふるさと水を打つ
明易や看取り終へれば古稀近き
子に頼りも頼られもせずらっきょ漬く
滴りの一滴ほどの一世かな
子に伝ふるは何あらむ盆の月
本籍は風の遊び場ゐのこづち
山里にクジラの化石蚯蚓鳴く
道なりに真っすぐに行く吾亦紅
アラートのきなくさき世や木の葉雨
首といふ首あたためて根深汁
雪起し喝と目を剝く鬼瓦
息白く正論を吐く漢なり
地層のごと積みし書を引く日短

入　選

冬の薔薇

八峰町　柴田悦子

モナリザの微笑に真似て春の風邪
ころころと笑う子春の山動く
タンポポやこんなに輝く光もち
平和へとの父の遺志継ぐ水芭蕉
六月の残照父と波の音
亡き父の文は一通植田の箋
反戦を言い続けます芒原
英霊の数に菊花の及ばざり
石蕗咲いて硯の海は父のうみ
小鳥来る観音様の指の先
青柿のこんなに落ちて少子化に
新小豆卑弥呼の国の紅であり
「脚下照顧」家路に大き冬の虹
ダイヤモンドダスト銀河鉄道最寄駅
有難うを素直に言って冬の薔薇

令和五年度

作家賞 応募作品について

今年度は七人と少人数の応募でした。年々減少傾向にあり、今後の懸念材料のひとつではありますが、殺伐とした社会環境の中で今回果敢にご応募いただいた七編からは、並々ならぬ意欲と、その熱量を感じ取ることができました。

改めて敬意を表し感謝を申し上げます。

応募作品

「高清水の丘で」「日々雑感」
「枇杷の花」「一滴」「くすくす」
「蛇苺」「冬の薔薇」

作家賞選後感

選考委員　竪阿彌　放　心

令和五年度第二十九回秋田県現代俳句協会作家賞の応募作品が森田千技子さんから送られてきて、七編とはずいぶん少ないと思った。しかしこれは会員数がぐんと減ってきているので止むを得ないことかもしれない。十五句まとめて作ることは大変であるが、来年は皆に挑戦して貰って、盛り上げかつ俳句界の発展充実に継げてもらえればと願うばかりである。

○くすくす

・木の実落つポケットのないワンピース
・りんご掩ぐすつかり空気入れかはる
・ずずずずず猫の鼾と後の月

私が第一位に推し、他の選考委員の多くが肯い、作家賞に決まった作品。一句目、木の実が落ちても、ワンピースにはポケットがありませんから入れることができない。そこがまこと俳諧的と思う。二句目は、自然に空気が入れ替わったのか。私はりんごを掩いで、その小さな動きで入れ替わったと思いたい。何とも言われない感じのする好句。三句目は猫の生態をよく見ている。私なら「と」を「や」にしてしまうが、そうすると古い句になってしまうかもしれない。あとで、作者は片倉弓さんと知って、長い間応募を続けてきて、ようやく陽の目を見たと喜びたい。

○一滴

・道なりに真っすぐに行く吾亦紅
・雪起し喝と目を剝く鬼瓦
・息白く正論を吐く漢なり

大体の選は他の人とずれており、同じくなることは少ない。ただこの度は私が一位・二位・三位に推した作品が、全体でもそのようになった。不思議なことである。この中で、第一句目の句が私のもっとも評価する句。説明の必要もありません。二句目は「雪起し」と「目を剝く」が予定調和のような気もするが、まず是しであろう。三句目は不思議なことに誰もこの漢の正論を信じまい。そこが面白い。全体として、この作者の句は安定していると思う。あとで作者は岸部吟遊さんと知らされてむべなるかなと。

○冬の薔薇

・青柿のこんなに落ちて少子化に
・有り難うを素直に言って冬の薔薇

一句目。青柿の落ちるのと少子化は因果関係ないはずだが、こう書かれて見ると、なるほどと納得してしまう。その不思議さ。二句目、これはわかりやすい。冬の薔薇には素直にさせる何かがあるのかしら。選考が終って、作者が明かされ、柴田悦子さんの作品と知った。ベテランの方が応募されて、入賞されたことは嬉しく思う。

他の応募者の句を一句ずつ挙げて、責めを塞ぐ。

・森閑と古代の井戸の水澄めり
・破れ蓮が戦禍に見えて暮れ残る
・せせらぎの村まで続く濃山吹
・蛇苺摘んでもらえぬ花咲かす

選考寸感

選考委員　加藤昭子

○作家賞「くすくす」

・木の実落つポケットのないワンピース
・小鳥来るややのしゃつくり大人並み
・ずずずずず猫の鼾と後の月
・澄む水の石より固き母の黙

いきなり表題に驚き、句群を読み終え、にんまり、なるほど作者の世界観が見えてきた。日常から掬い取った「くすくす」木の実を見つけたのに、あらっ、ポケットがない。赤ん坊のしゃっくりに家族中大笑い、猫って意外と大きな鼾をかくんです。母の頑固さは天下一品、「秋の水」との取り合わせにも独自性が表れている。柔らかな表現に惹かれた。

○準作家賞「一滴」

・子に頼りも頼られもせずらっきょ漬く
・滴りの一滴ほどの一世かな
・首といふ首あたためて根深汁

今時の家族の事情、しっかりと自分の生き方をみつめている。暮らし方の大きさも形も諾うという境涯感。大勢で根深汁を食べているのだろうか、寒さを凌ぐ暖かい食べ物、会話も弾むというもの。骨格のしっかりとした句が目を引く。破綻がなく、二物の配合が効いている。

○入選「冬の薔薇」

・ころころと笑ふ子春の山動く
・小鳥来る観音様の指の先
・ダイヤモンドダスト銀河鉄道最寄駅

春の明るさ、健康的な情景に惹かれる。どこかの寺社の風景か、しなやかな観音様の指に焦点、穏やかに過ぎて行く心の時間。寒さも本番、ダイヤモンドダストの輝きに、思わずファンタジックな世界に惹きこまれたのだろう。

旧かな、新かなの混在がみられ残念だった。

その他、選外となった作品の共鳴句を引く。

○「高清水の丘で」

・蜂起なき朝を揺れて鬼薊
・誰も身を乗り出す舞台豊の秋

高清水という地域の史実、句群が舞台の中である事を解らず、読み解くまで時間が掛かった。全体に流れる歴史的背景と現在が混在しており難しかった。

○「日々雑感」

・信号は右折に変わり花は葉に
・破れ蓮が戦禍に見えて暮れ残る

作者の日常を通して見えて来る生き方、出水の後の立ち位置。題名にもう少し工夫が欲しかった。

○「枇杷の花」

・せせらぎの村まで続く濃山吹
・誰つけし「浮気心」と名のダリア

全句を通し、花がテーマ、無難にまとめている。どっきりが欲しかった。

○**「蛇苺」**

・蛇苺拓地へ錨下ろしけり

・銃弾が蛇苺ならごっこなら

全句に「蛇苺」を据えた。心象の深さを感じたがどこか詩感が薄いのでは。季語を変えたら良くなると思った。

選考寸感

選考委員　片倉俊秀

○**作家賞「くすくす」**

・芒に風何もなき日のお赤飯

・木の実落つポケットのないワンピース

・りんご挽ぐすつかり空気入れかはる

・鰭酒や父高らかに羽後訛

・白鳥来こんなに風のきれいな日

何の変哲もない日常生活の中に、そのつど新しい発見や感動を見出し、詩的世界を創造している。

一句目、自分への褒美か、励ましか。二句目、ポケットが無いから木の実を持ち帰れないというウイット。三句目、すっかり実を採られた後の寂寥感。四句目、父親への愛しみ。五句目、大自然を感受。

俳句が自然体でかつ自在である。純粋な抒情の世界へいざなっている。

○**準作家賞「一滴」**

・住み着きしここがふるさと水を打つ

・滴りの一滴ほどの一世かな

・本籍は風の遊び場ゐのこづち

・雪起し喝と目を剝く鬼瓦

・息白く正論を吐く漢なり

全体を通して対象を自分の人生に重ね合わせている。重厚感のある句群で共感がもてる。一句目、人生の終盤をふるさとへ帰ってきたのであろうか。二句目、題名句である。自分の人生を「一滴」と捉え重ね合わせている。三句目、故郷を「本籍」とし子ども時代が蘇る。「ゐのこづち」が効いている。四句目、「雪起し」と「鬼瓦」の取り合わせが厳しい自然を表現。五句目、その中で筋をとおして生きる漢を表出。重さを感じさせる。季語の使い方も上手である。

○**入選「冬の薔薇」**

・タンポポやこんなに輝く光もち

・反戦を言い続けます芒原

・新小豆卑弥呼の国の紅であり

一句目、タンポポの光を「こんなに」と再発見したところに平和への希望を表出している。二句目、「反戦」と「芒原」の取り合わせは絶妙。季語をきっかけに反戦平和のむずかし

さを暗示させている。三句目、「新小豆」と「卑弥呼の国の紅」の取り合わせが秀逸。小豆が大陸から伝来し、卑弥呼の時代には薬効のある食材として珍重されていたのだろう。

○その他共感した句

・穐田や千秋楽へ湧くみどり
・破れ蓮が戦禍に見えて暮れ残る
・届かねど師に問ひたきや枇杷の花
・靴底のみぞに潜んで蛇苺

独自の視点で

選考委員　船越　みよ

年々応募数が減っていくことを憂いつつ、毎年挑戦する方々の熱意と意欲に感謝したい。選考は、自分の力量が問われることであり、責任の重さと難しさを感じている。全体的に、はっと心を動かされる句の少なかったことが残念であった。自戒を込めて、季節や生活の変化を独自の視点でとらえ表現する努力をしたいものと痛感している。

○作家賞「くすくす」

・芒に風何もなき日のお赤飯
・木の実落つポケットのないワンピース
・りんご掩ぐすつかり空気入れかはる
・うそ寒し頭痛は河童のお皿ほど
・鰭酒や父高らかに羽後訛

読みの意欲をそそられる表題。日常生活のちょっとした変化、その営みの中に湧くくすくすとした感情が作品を貫いている。表現は平明で伝達性がある。軽快なリズム感のある句とやや重厚な句との配列に工夫があり。構成が上手いと思った。何もなき日の赤飯に重なる在りし日の思い、木の実を拾う童心への懐かしさ、収穫時の林檎に寄せる季節の空気感など、くすっと快い温もりに軽妙さを感じた。

○準作家賞「一滴」

・日本海は大き内海黄水仙
・滴りの一滴ほどの一世かな
・本籍は風の遊び場ゐのこづち
・地層のごと積みし書を引く日短

「滴りの一滴」が来し方を暗示しており、在所や本籍地、家族への思いなどを通して、自分の生き方を見つめている。変化の激しい世情への思いも伝わってくる。日本海を取り巻く状況の変化への危機感、風の遊び場と季語の配合のよさに惹かれた。独自の見方をどう表現するか、作者の観察眼の鋭さから生まれる新鮮さを大切にしたい。

○入選「冬の薔薇」

・平和へとの父の遺志継ぐ水芭蕉
・小鳥来る観音様の指の先
・新小豆卑弥呼の国の紅であり

亡き父への思いが通底しており、平和への願いと今生きて在ることへの感謝が伝わってくる。自然への畏敬の念を抱き年齢を重ねた生活実感が表出されている。観音様へのやさしいまなざし、悠久の卑弥呼の国へ至る思いに共感した。

○入賞には至らなかったが共感した句

・鵜駆け天馬を想う丘の空
・鎮魂の洗いざらして夏のシャツ
・やさしさは秋明菊のほどがよし
・蛇苺拓地へ錨下ろしけり

努力に敬意

選考委員　三　浦　静　佳

今回、作家賞の選考委員として初めての選に加わった。テーマ、タイトル、十五句の構成、余情など、応募していた頃の自分を思い出し、一句一句を丁寧に読ませていただいた。

○作家賞「くすくす」

・里山の親しき沢の秋出水
・木の実落つポケットのないワンピース
・天高し君はくすりと笑ふ癖
・りんご捥ぐすつかり空気入れかはる

タイトルの「くすくす」が醸し出すどこか都会的な雰囲気に好感を持ち、作品にすんなり入っていくことができた。秋出水による暮らしの危機感。ポケットのないワンピースと木の実の配合。くすりと笑ふ、からのタイトル。全身で表す収穫の喜び。

○準作家賞「一滴」

・住み着きしここがふるさと水を打つ
・滴りの一滴ほどの一世かな
・本籍は風の遊び場ゐのこづち
・山里にクジラの化石蚯蚓鳴く

婚家が今では作者自身のふるさとだ。一世の短さに今更ながらに驚く。本籍の、生家への鎮魂の句。太古の昔へ馳せる思い。句全体に作者の生き方に対する信念のようなものが伝わってきて重厚な力作。

○入選「冬の薔薇」

・ころころと笑ふ子春の山動く
・亡き父の文は一通植田の箋
・ダイヤモンドダスト銀河鉄道最寄駅

笑う子の仕草が春の山が動くようだとの感受に共感。植田に寄せる子の、父への思い。ダイヤモンドダストの夜の亡き父を偲ぶ。

今回の応募作に「蛇苺」という、十五句全体に蛇苺を用いた意欲的な作品があった。次回の更なる健闘を祈っている。

・銃弾が蛇苺ならごっこなら
・蛇苺毒と言われたまま生きて

○入賞以外で共感した句

・森閑と古代の井戸の水澄めり
・誰も身を乗り出す舞台豊の秋
・秋茄子の紫黒深めていく思案
・師を訪えば老友と言う秋の日に
・せせらぎの村まで続く濃山吹
・文机にコスモス一輪筆走る

選考寸感

選考委員　森　田　千技子

○作家賞「くすくす」

・芒に風何もなき日のお赤飯
・木の実落つポケットのないワンピース
・りんご挽ぐすつかり空気入れかはる
・ずずずずず猫の鼾と後の月

どの句も作者の気負いのない日常が、軽快なリズム感で表現されている。何事もない日々という平凡こそ非凡であろうとする作者の価値観が心地好い。「お赤飯」を炊いて何もない日を模様替えしてしまうこの豊かな感性が随所に表出されていて好感がもてた。

○準作家賞「一滴」

・滴りの一滴ほどの一世かな
・本籍は風の遊び場ゐのこづち
・道なりにまっ直ぐに行く吾亦紅
・地層のごと積みし書を引く日短

句群の一句一句に、作者の堅固な生き方が彷彿する。季語の扱い方も巧いと思った。悟りのような「一滴ほどの一世かな」、己の決めた道を「まっ直ぐに行く」気概、「地層のごと積みし書」で知見を広げる柔軟な暮らし振りなど、重層的な句が並び惹き付けられた。作者の真摯な生き方が映し出されて共感する。

○入選「冬の薔薇」

・反戦を言い続けます芒原
・石蕗咲いて硯の海は父のうみ
・新小豆卑弥呼の国の紅であり
・有難うを素直に言って冬の薔薇

苦難の歴史を生きてきたであろう亡父の思いとその影響を強く受けた作者の来し方が交錯する句が並ぶ。「新小豆」から「卑弥呼の国の紅」まで掘り下げた感性は独特である。新旧の対比が効いている。常に「脚下照顧」の精神で日常を見つめ、感謝の心を忘れずに生きてきた作者の真実が見えてくる。

○惜しくも入賞には至らなかったが共感句を挙げたい。

「枇杷の花」から

・父母の確かな教へ茄子の花

・やさしさは秋明菊のほどがよし

草花をテーマに作者の日常が細やかな感性で編まれている。全体的にやや穏やか過ぎたように思う。

「高清水の丘で」から

・森閑と古代の井戸の水澄めり

・蜂起なき朝を揺れて鬼薊

豊かな歴史の高清水の丘が舞台。史実への踏み込みは巧み。ただ、現実感に乏しく、作者の内面に入り切れなかった。

「日々雑感」

・夜濯ぎの汚れほどほど生きている

・師を訪えば老友と言う秋の日に

来し方への思いをしみじみと詠んで共感。一方で具象性に欠ける句も散見した。

「蛇苺」

・蛇苺拓地へ錨下ろしけり

・蛇苺毒と言われたまま生きて

対象の把握にひと工夫あり感心したが、同じ季語で全句を並べる難しさを痛感する。

第三十回　秋田県吟行俳句大会

コロナも五類へと移行となり、四年ぶりに吟行俳句大会を実施する事ができた。

久しぶりの吟行なので、大町ビルを中心に自由散策とした。傘をさすほどでもない雨の中、十五名参加でミルハスやエリアなかいちの句が集まった。

令和五年六月二十三日（金）午前十時より

◆泉屋おさむ特選

赤レンガ槍以て登る蝸牛　田村　陽子

◆首藤圭特選

俄雨背筋伸ばして蓮青葉　藤原貢太郎

◆木村和影女特選

コロナ後のかろき季語帳青葉雨　三浦　静佳

◆高点句賞

第一位　どうする少子化緑雨の藩主像　船越　みよ

第二位　ぱつくんと梅雨を吸ひ込む鯉の口　片倉　弓

大欅蟻の雑兵雨やどり　田村　陽子

第四位　赤レンガ槍以て登る蝸牛　田村　陽子

なかいちの客足鈍し梅雨湿り　藤原貢太郎

第六位　ミルハスの堀睡蓮のせめぎあい　片倉　俊秀

ミルハスや小雨に濡れる夏柳　武田　光子

第八位　ミルハスや郭公の森背負い建つ　大川　悦子

令和五年度　俳句を語る会

コロナ禍などにより、五年ぶりの開催である。十六名参加、雑詠一句「海」詠み込み一句を投句。今回は特定選者・助言者を設けず、全員から鑑賞・意見・感想を述べあった。

全体進行を加藤昭子氏、雑詠の部は森田千技子氏、詠み込みの部は片倉俊秀氏が進行係を担った。

久しぶりの語る会ではあったが達成感もあり、熱心な会であった。参加者それぞれの高点句は次の通り。

令和五年七月二十二日（土）午後一時より大町ビルにて、開催。（○は「雑詠」「海」互選一位）

草むしる活断層に跪き　佐藤二千六
梅雨寒や世にワクチンの無かりせば　泉屋おさむ
青葉風五臓六腑を満たしたし　菅原ミヤ子
風鈴のひびき生命線延びる　三浦　静佳
十薬の溢るる白や母多忙　片倉　弓
鬱の字を譜面にばらす梅雨の雷　田村　陽子
○人の名をほどよく忘れ心太　加藤　昭子
流木に住み着く蟻や海知らず　藤原貢太郎
戦なき海深みどり沖縄忌　鈴木　栄司
サーフィンに挑む少女の名は海（マリン）　船越　みよ
○夏の海描いてちょこんと男鹿の山　堅阿彌放心
夏海を走る翔平の勝負球　森田千技子
海底に眠る御霊や終戦日　木村和影女
夏の月静かな海の着信音　片倉　俊秀
○巡視船でてゆく夏至の海平ら　加藤　隆二
海に向く崖に息づく透かし百合　首藤　圭

第三十七回　現代俳句東北大会（於・福島市）

◆福島県現代俳句協会長賞
一生を一職に生き大昼寝　能代市　戸田佐江子

◆佳作賞
草むしる裏日本にへばりつき　大仙市　加藤　昭子

◆中村和弘特選　木嶋玲子特選
O脚のままにGパン乾く朱夏　横手市　佐藤二千六

◆高野ムツオ特選
草むしる裏日本にへばりつき　大仙市　加藤　昭子
過疎なんぞ俺は知らぬと草茂る　由利本荘市　佐々木建夫

◆松宮梗子特選
踊子草の踊り放題おらが村　三種町　三浦　静佳

◆名久井清流特選
電柱が十字架になる秋夕焼　由利本荘市　佐々木建夫

◆竪阿彌放心特選
うつ伏せの水甕夏至の骨董屋　大仙市　加藤　昭子
弔いの小さな家族ソーダ水　大仙市　加藤　昭子

◆畠山カツ子特選　成田一子特選
一生を一職に生き大昼寝　能代市　戸田佐江子

◆宮崎　哲特選
後継ぎの無くてぐいぐい青田濃し　横手市　佐藤二千六

◆池田義弘特選
山寺に届く百丁新豆腐　能代市　戸田佐江子

◆鈴木正治特選
こだわりのいつもの器水羊羹　三種町　向田久美子

第六十回 現代俳句全国大会（於・上野）

◆**特別選者賞**

小菅白藤特選一位
ふたり目を産んで麦藁帽似合う　北秋田市　五代儀幹雄

◆**秀逸賞**

ふたり目を産んで麦藁帽似合う　北秋田市　五代儀幹雄
涅槃図に少し捲かれた象がいる　秋田市　小林万年青
故郷は出口ばかりの四月尽　横手市　佐藤二千六

◆**特別選者特選**

辻脇系一特選二位・前田弘特選二位
ふたり目を産んで麦藁帽似合う　北秋田市　五代儀幹雄

寺井谷子特選三位
涅槃図に少し捲かれた象がいる　秋田市　小林万年青

◆**一般選者特選**

高橋和彌特選一位・山本志津香特選一位
故郷は出口ばかりの四月尽　横手市　佐藤二千六

原雅子特選一位
涅槃図に少し捲かれた象がいる　秋田市　小林万年青

原田要三特選一位
みほとけも神も遊べり大花野　横手市　阿部清流子

大類つとむ特選・原雅子特選
水番の末裔という家涼し　潟上市　竪阿彌放心

江中真弓特選・羽村美和子特選
ふたり目を産んで麦藁帽似合う　北秋田市　五代儀幹雄

村松二本特選
ピーマンの部屋にミサイル飛んで来た　井川町　森田千技子

編集後記

会報九十五号をお届けします。

新年は能登半島地震、羽田の航空機衝突事故と厳しい幕開けとなりました。被災された皆様に衷心よりお見舞い申し上げます。

昨年は、四年振りに「吟行俳句大会」、五年振りに「俳句を語る会」を実施できました。少しずつではありますがコロナ以前に戻りつつあります。今後とも皆様のご理解を頂きながら、更なる事業の充実を図って行きたいと思いますので変わらぬご支援ご協力を宜しくお願い致します。（森田）